

(肥後の地で前野良沢)、永井、土井(前期は鳥羽城から唐津城へ。後期は唐津城から古河)、堀田(佐倉藩で順天堂設立)等々十二藩の移動があった。

土井藩は越前大野(利忠時代に洋学藩)と刈谷(隣藩田原に華山。少々洋学)に支藩があつて、全藩共通で蘭学を入れた。

古河土井藩が鳥羽城時代は蘭医河口良閑を迎え、中江藤樹系学者を多く召抱え、唐津に移城してからは、島原藩と交代で長崎奉行を管したので、蘭学を直々長崎から吸収した。

取り分け河口信任が長崎栗崎道意門下で蘭医となり以降の古河焔城後は、蘭学者鷹見泉石を指導した。よつて佐幕開港古河藩となり、古河藩からは杉田玄白一族門下、大阪適塾門下、伊藤玄朴の象先堂門下の医者が多発した。

中でも河口家は足利義輝に仕えた水軍の将で、松浦藩に召抱えられてポルトガル医学の初期及び長崎蘭医学カスパー門下となり、累代医学で土井藩に仕えたので、歴代河口家の医学資料の殆どは古河歴史博物館に寄託されてある。

他の土井藩召抱え漢方医系の医書も少しく古河歴史博物館に集まつて来ている。この博物館は筆者が設立・建設委員長となつて、バブル期に完成したので、古河の医学資料の永久保存は可能となつた事は、欣快に耐えない。

## 11 史的医学建築物の保存を訴える

小林 晶

医学史上大切な資料は散逸を防止し、保存に全力を挙げなければならぬが、建築物に関しては規模が大きくなるため、どうしても実現が困難なことがある。

私の母校で起こつた残念な事柄をここで恥じを忍んで例証として示して、今後医史学会としての取り組みを懇願したい。

九州大学医学部解剖学教室講堂は明治三十六年八月に完成している。私が最初の講義を受けたのはこの講堂であつた。医家出身でない私にとって医学に関する講義が、いかに新鮮に感じられたか筆舌に尽くし難い。さらに、この講堂が明治の香りがする木造階段教室で、幾多の先輩が使つた机について、白熱電球の下での雰囲気はそれだけでも陶醉させるものがあった。春は桜に囲まれる講堂は、新入生にとって眩いばかりの印象を植え付けた。

最初の金関丈夫教授(山口県土井ヶ浜遺跡発掘調査にあつた

って活躍された)の骨学の講義では、手ぶらで入ってこられた教授がいきなり滔々とラテン語を羅列され始めたことを記憶している。

ところが、昭和四十年代から医学部建築の計画があり、この講堂が壊されることがわかり職員、同窓生にこの由緒ある建築物の保存の機運が起り、無事中央講堂脇に移転保存された。われわれ同窓生は昔を偲ぶ対象が永久に存在されることを喜んだものであった。

しかし、医学部近代化と称する無計画な新建築が、突然この講堂を破壊してしまったのである。

この破壊計画を耳にしたとき、一刻も早く保存された解剖学講堂を、再移転しなければと同窓会誌に訴えた。この原稿が受理されたとき、「もう崩され始めていますよ」と受付女性の返答を耳にし、啞然とし絶句してしまった。

この暴挙について教授会あるいは同窓会幹部に返答を求めると、以前からこの破壊は同窓会に計って決定されていたとのことであった。これを今更なじつてどうにもならないことは、重々わかつてはいても憤懣やる方ない思いは今に続いている。

未だ古い大学には医学に関係ある建築物が残っているはずである。この保存こそ子孫に伝える文化財の最たるもの

ではないかと、考えている。膨大な費用がかかることは承知の上で、破壊から救う賢明な方法を模索、実施するため、医史学会が立ち上がる必要があると切実に訴えたい。

この種の文化財の点検と保存対策を早急に開始して貰いたい。文化財保護審議会は民家、橋、環境などについて申請があれば検討して指定しているので、公費負担での方法も加味されて良いと思う。この点からのアプローチも是非考えて頂きたい。何よりも大切なことは、医学部の識者を含めた人達に、是非医学史の文化財保護に関心を持って貰うことである。

## 12 資料と私と目録

佐藤 允男

現今の病院図書室(館)や医学図書館は、それぞれの施設の知的中枢機能を求められている。

先人の生き方と残した資料を知りたくて平成二年の日本医史学会に出席した。そこで関西支部春季大会の案内を見て後、その会にいられて頂いた。会では寺畑喜朔先生が各地